

小学校における英語教育に関する研究

——国際コミュニケーション能力の育成に着目して——

渡真利 伶香

I はじめに

早期外国語教育の重要性は、昨今、国際理解教育の一環として注目されるようになった。ユネスコは1974年「国際理解、国際理解協力および国際平和のための教育に関する勧告」の中で、「加盟国は、例えば人種に対する態度のような基本的態度は、就学前の時期に形成されるものであるため、この勧告の目的に沿う活動を就学前に行うよう奨励すべきである」と提唱している。

わが国では、ようやくこれらの状況下のなか、2002年度から新学習指導要領の移行期に入り、小学校で「総合的な学習の時間」が設けられ、国際理解教育に関する学習の一環として外国語会話をを行うことが可能となった。小学校での外国語会話等に関する学習の目的は、外国語の習得ではなく、むしろ相手の話や文化的背景を聞き取る力や、聞こうとする態度、自分の思いや意見をはっきりと述べたり、主張したりして相手に理解させることができる力の育成である。

しかし、どのような内容で、英語活動を行うかは明確にされておらず、実際の教育現場では、混乱が起こり、学校によって大きな差異が生まれているのが現状である。

そこで、本論文では小学校における英語教育がどのようなものであるかを理論的に整理し、また実際に小学校で英語教育を行っている授業内容等を参考にしながら、これからの小学校での英語教育のあり方について考察していく。加えて、コミュニケーション能力という点に着目し、小学校での英語教育に関するあり方を示唆することを目的としている。

II 文部科学省が示す

「総合的な学習の時間」における英語学習

II-1 公立小学校における英語活動に至る経緯

文科省（*2002年度より、文部省から文部科学省に名称が変更されたが、ここでは、すべて文科省に統一している）が小学校英語についての議論の話題に出たのは、1986年4月の臨時教育審議会第二次答申での「英語教育の開始時期についても検討する」とされたのが始まりであった。これ以降1991年4月から「外国語教育の改善に関する調査研究協力社会議」が設置されたのを期に、12月には臨時行政改革推進審議会（第三次行革審）の「豊かな暮らし部会」が小学校への英語導入を検討するように提言した。1992年1月、の日本教職員組合第41次教育研究全国集会において大場委員長より「今日の実験のための英語教育を根本から見なおし、生活英語として英語教育を小学校の早い段階から導入すること」が提言された。同年2月には、文科省初頭中等教育局長が、外国語教育を公立小学校に導入することについて文科省も検討を始めたことを示唆した。その後、大阪市立真田小学校と味原小学校、同市立高津中学校などが教育開発実験校に指定され、公立小学校における本格的な英語教育の実験が始まった。1996年には上記等の研究開発学校であった16校も含め、47都道府県すべてに1校ずつ、研究開発学校が指定された。同年7月には、第15期中央教育審議会が「21世紀を展望したわが国の教育の在り方について—子どもに『生きる力』と『ゆとり』を」と題した第一次答申を発表し、この中で英語を教科として扱うという考え方は見送られたが、新設された「総合的な学習の時間」や特別活動などで、国際理解教育の一環として英会話などに触れる機会や外国の生活、文化に慣れ親しむ機会を持たせるようにする方針が示された。

以上の事を踏まえた上で、1998年12月に新学習指

導要領が告示され、その中で、各学校がゆとりの中で特色ある教育を展開し、児童に豊かな人間性や基礎・基本を身につけ、個性を生かし、自ら学び考える「生きる力」を培うことを基本的なねらいとした。その基本方針とは、

- ①豊かな人間性や社会性、国際社会に生きる日本人としての自覚を育成すること。
- ②自ら学び、自ら考える力を育成すること。
- ③ゆとりのある教育活動を展開する中で、基礎・基本の確実な定着を図り、個性を生かす教育を充実すること。
- ④各学校が創意工夫を生かし、特色ある教育、学校づくりを進めること

とした。このねらいを達成するために、「総合的な学習の時間」が設けられ、そこで行う学習活動の例として国際理解教育が上っており、その一環として「外国語学習等」が位置づけられた。1999年5月に発表された『小学校学習指導要領解説 総則編』では、さらに次のように述べられている。

小学校での外国語に関する学習は、これまでクラブ活動の時間などで行われてきた。総合的な学習の時間の創設に伴い、地域や学校の実態等に応じて、この時間に外国語会話等を行い場合は、あくまでも国際理解教育の一環として、中学校の外国語教育の前倒しではなく、児童が外国語に触れたり外国の生活、文化に慣れ親しむような小学校段階にふさわしい体験的な学習を行うようにすることが大切である。

具体的な学習活動としては、小学校段階にふさわしい歌、ゲーム、簡単な挨拶やスキット、ごっこ遊びなど音声を使った体験的な活動、作品交換や姉妹校流など外国の子どもたちとの交流活動、ネイティブスピーカーなどとの触れ合いなどを積極的に取り入れ、外国語に慣れ親しむことや外国の生活・文化に触れ、興味・関心を持たせるようにすることなどが考えられる、とある¹⁾。

上記にあげたように、文科省は第二言語習得という視点ではなく、外国の生活や文化に慣れ親しんだり、体験的な学習を念頭においたものであるのは明確である。しかし、2000年に発足した「英語指導方法等改善の推進に関する懇談会」では、これまでの英語教育の実態や言語環境等も踏まえ、再検討がおこなわれ、翌年2001年1月に最終報告書が提出された。ここで、小学校での英会話学習についてという箇所があり、1999年に発表された文章では、歌や遊びを中心に英語学習を進めていくと記載されたのに対し、今回の発

表では、「歌や遊びだけでは不十分で、学習の段階に応じた指導を考えることも重要である」と置き換えられている。また、最後には「教科としての英語教育の可能性等も含め、今後も積極的に検討を進める必要がある。」とされた。これらを踏まえた上で、小学校での英語活動の具体的な内容を提示するため、文科省は2001年に『小学校英語活動実践の手引き』を刊行した。この『手引き』は理論編と実践事例編との2部で構成されており、理論編で提示されている基本的な考え方は、①英語活動は国際理解教育として行われ、国際理解教育を前提とした1つの柱にすぎない、②英語活動のねらいは第二言語習得ではなく、興味・関心・意欲の育成である、③音声言語中心であること、④学級担任が中心に授業を進めるのがよい、⑤体験的な活動が中心であること、⑥学習の過程や参加度が評価の対象となること、であると捉えることができる。

次に実践事例編では、英語活動、調べ活動、国際交流活動の3つに重点がおかれ、学年ごとの年間活動計画の例の提示はなく、一学期だけの例にまとめられている。おそらくこれは、文部科学省が当初から『総合的な学習の時間』は学校の裁量に委ねるとした考えでもって、1つの基準であって模範ではないことを示すためであろう。

このように、文科省は小学校で英語を教科にする考えがあることを提示したものの、国際理解教育としての英語活動であり、言語習得を目指したものではないと点は一貫している。

II-2 国際理解教育とは

1で示したとおり、文科省は小学校での英語学習は総合的な学習の時間で国際理解教育の一貫として行うべきであることを主張している。では、国際理解教育とは、具体的にどのようなものなのか。

近年、交通、通信手段の発達によって、さまざまな情報が飛び交い、交流がより活発に、容易になってきた。これらは、様々な国民、民族との相互接近や相互依存を深め、様々な面での国際化を加速させている。人と人との相互交流は今後より一層深まることが予想される。

これらの社会的背景を受け、文科省は「国際理解」のねらいの背景として、第15期中央教育審議会の答申(1996年7月)における国際化に対応する教育の推進に関する3点の留意点を以下のように示した。

- ①広い視野を持ち、異文化を理解するとともに、これを尊重する態度や異なる文化を持った人々と共

に生きていく資質や能力の育成を図ること。

- ②国際理解のためにも、日本人として、また、個人としての自己の確立を図ること。
- ③国際社会において、相手の立場を尊重しつつ、自分の考えや意思を表現できる基礎的な力を育成する観点から、外国語能力の基礎や表現等のコミュニケーション能力の育成を図ること。

「国際理解」のねらいは、単に知識の習得にとどまらず、自ら学び取る能力の習得であり、特に③で求められている外国語によるコミュニケーション能力の育成という観点で、「外国語会話」は国際理解を進める上で自ら学び取る能力の育成にとっての手段になり得るという重要な役割を担うものだと位置づけられている。

つまり、「国際理解」に関する学習の一貫としての「外国語会話」という意味は、自ら学び取る能力の習得として、国際理解の学習の重要な要素であるということになる。

このように、「国際理解」と「コミュニケーション能力」とは密接に関係しあっていることがわかる。大津和子、米田伸次らは『テキスト国際理解』²⁾のなかで、世界のグローバル化と日本の社会の国際化という現代の変換に対応して、育成を必要とされる資質の1つとして、コミュニケーション能力を「単に外国語ができるということだけではなく、自己の意見や考えを持ち、それを適切に表現すると共に、他者からのサインやメッセージを受けとめ、時には他の情報も活用し、的確に判断しながら、互いに理解を深めていく能力」としている。

つまり、単に外国やそこに住んでいる人々に関する知識を与え、その知識を記憶させるのではなく、自ら学びたい、知りたいと思わせる情報を受信・発信する能力を育てることが重要になってくる。これこそが、コミュニケーション能力である。

日本人のコミュニケーションの有り様が外国人とコミュニケーションを行うのに、日本人に対するコミュニケーションと同じような手法を用いていることに原因あると言われている。国際化の時代に生きる子どもたちにとって積極的にコミュニケーションを図る態度や、論理的に表現したり、建設的に討論する能力が必要である。加えて、わが国のコミュニケーション能力のあり様ではなく、国際的に通じるコミュニケーション能力を養うことによって、これらの問題を打破することができるようになるのではないだろうか。これらの能力を筆者は、国際コミュニケーション能力としている。

Ⅲ 英語教育の歴史が長い 小学校での授業分析

2003年度4月から7月にかけて、英語教育の歴史が長い私立のA小学校での授業観察を行った。実際どのような授業が行なわれているのか、児童と教師との間での問題はないのかについて検証を行った。

(*この研究は、学校で英語教育を行っている小学校とそうでない小学校との学力、意識に関する比較研究をすることを目的として実施した。しかし、本論文では枚数の上限があるため、英語教育を行っている小学校を中心に論を進めている)

Ⅲ-1 研究対象校

このA小学校は関西の閑静な場所にあり、小学校から高校まで一貫している女子校である。キリスト教を中心とした学校であるため、110年程前にオーストラリアから日本に修道女が伝導したことから、この学校は創立された。その為、当初は教員同士の会議はもちろんのこと、すべての授業は英語で行われていた。A小学校は、オーストラリアを初めとして、多くの姉妹校が海外にあり、日本においてもインターナショナル校も持っている。

創立以来、国際理解のための英語教育に力をいれ、異文化に触れ、英語に親しむように、「聞くこと」「話すこと」を重視している。この学校の英語教育における目標は、ますます国際化の進む中で、「オールラウンドな外国語コミュニケーション能力育成」を掲げている。

この小学校では、どの学年も1学年は約80人の2クラスで編成されており、1クラスの児童数は約40人となっている。英語の授業時にはこの1クラスを2つにわけた約20人の小人数制で授業が行われるのが特徴である。どの学年も1週間に2時間の英語の授業があり、1つは、ネイティブ教師、もう1つは日本人教師との授業が行われている。また、学年によって教師は異なり、A小学校には、2人の日本人教師と2人のネイティブ教師が授業に当たっている。

Ⅲ-1-1 小学校1年生の授業分析

1年生の授業では、まず担当教師のネイティブ教師、日本人教師が教室に行き、2つに色分けされたグループが、それぞれの教師に引率されながら英語教室へ移動するところから授業は始まる。担当教師が教室

に入ってきた時点から、すべて英語で指示を出す。英語教室に入ると、全員が靴を脱ぎ、一方の教室には机と椅子が円形上に並び、もう一方の教室は絨毯のひかれたフロアーに自由に座るといった形態をとっている。

例1：ネイティブ教師（机が並べられた教室で授業を行う）

教師：father finger（親指を出しながら）

児童：教師の真似をしながら father finger と言い、親指をだす。

教師：このスキットを mother, brother, sister, baby と順に繰り返していく。この時、father なら低い、mother なら女性らしい声を出す等、指を出す人物によって声を変えていく。

教師：歌にのせながら、father finger, father finger, Where are you?

Here I am.（指を出す。児童にも出すように指示を促す）Here I am.

How do you do?

児童：同じ様に、教師と一緒に歌を歌いながら、指を出し英語も発音していく。

この時、教師は、am の m を発音するときは、口をギュッと締めると言う動作を示し、発音の注意も自然に促していた。また、みんなで歌っていることが児童にとっては、相当楽しそうに伺え、ほぼ全員が積極的に参加していた。少し恥ずかしそうにしている児童には教師が側によって行き、顔を見合わせながら一緒に歌っていた。

このスキットを何度か繰り返し行う。その度に教師は Good!! Great!! Excellent!! と声をかけていく。

例2：ネイティブ教師

教師：What's, What's, What's

児童：What's, What's, What's

教師：her, her, her

児童：her, her, her

教師：name, name, name（name の m は口を閉じる動作を示す）

児童：name, name, name

教師：What's her name? She's Minny!!（教師の背後に隠していた人形を取り出す。）

児童：出てきた人形にワッと声を上げ、反応を示す。

例3：ネイティブ教師

教師：Good morning!!（手を大きく広げて）2回繰

り返す。

児童：手をひろげながら、Good morning!!

教師：and how do you do!!（隣の人と握手をする動作を見せる）

握手をする相手を教師が決めていく。

児童：決められたペア同士が握手をしながら、and how do you do!!

このスキットを、歌に合せながらつなげて何度も練習していく。

練習していくうちに、最初の一文を教師が発言しただけで、児童たちは自然にスキットを指示なしでも続けていくようになる。

例4：日本人教師

（ほぼネイティブ教師と同じように進められている。教室は、絨毯の引かれた教室、教師、児童共に円になって座る）

教師：It's dark here.（教室の電気をすべて消しておく）

教師：Let's（人差し指をたてる）put the light（天井についた電気を見上げながら）on!（手をパンとたたく）

児童：教師の後に続きながら、上のスキットを繰り返す。

教師：Aya!（1人児童の中から名前を上げる）Please put the light on!

呼ばれた児童：電気のスィッチを入れに行く。

教師+児童：Thank you Aya!!

これを、light, door...と単語を変えて続けていく。すると教師に名前が呼ばれようと、どんどんと児童たちが手を挙げてアピールしてくる。手を自ら挙げようとしない児童に対しても、あえて名前を呼び、参加を促す。命令された事が分からない児童には、その物に対して指を指す等のヒントを与えながら、活動を続けて行く。

例5：日本人教師

教師：Circle in!×2, Duo×3（歌に合せながら、座っている円を小さくしていく）

児童：Circle in!×2

教師：Shake your fingers（手をブラブラと振る）down（手をおろす）

児童：Shake your fingers（手をブラブラと振る）down（手をおろす）と模倣する。

円を小さくしたり、in を out に言い換えて円を大

大きくしていったりと、体を動かしながらスキットを続ける。

例 6：日本人教師

教師：Touch your nose!と言いながら鼻を触る。

児童：教師の後に続き、Touch your nose!と声をそろえて、言いながら鼻を触る。

これを、tin, head, shoulder, …と続けていき、だんだんとリズムを速くしていく。リズム感があり、ゲーム感覚でできるため、ほとんどの児童が積極的に参加している様子であった。また、少し恥ずかしそうにしている児童に対しては傍まで行き一緒に歌ったり、動いたりして授業への参加を促していた。

Ⅲ-1-2 小学校 1 年生の授業分析

例が示す通りネイティブ教師・日本人教師共にほぼ円滑に授業が進められていた。

例のように、ほとんどの授業は歌に合せながら体を動かし、スキットやフレーズを覚えていくものが多い。

これらの授業方法は、全身反応教授法 (Total Physical Response, TPR) と呼ばれるものである。TPR とは 1960 年代の終わりに心理学者 J. Asher によって開発された、命令 (commands) に基づく体系的なアプローチである。TPR は、教師は命令することによって学習者とかかわり、学習者はその命令にあった動作をすることによって理解したことを示す³⁾。

児童の反応はととてもよく、発音も驚くほど綺麗であった。積極的に英語で教師に話しかけたり、「英語の授業が楽しみ」と答える児童はととても多い。小学校低学年は多くのことに興味を抱いており、歌や体を使うことにあまり抵抗はなく、効果的に TPR を用いた教育が行うことができる最適な年齢だと思われる。

Ⅲ-1-3 小学校 5, 6 年生の授業記録

授業形態は低学年と同様で、クラスを 2 つに分けた 20 人前後で行われ、1 週間に 2 回ある英語の授業はネイティブ教師、日本人教師が 1 人づつ担当する。5, 6 年生はほとんどが似通った授業が行われていた。中学年から、「Picture Dictionary」と呼ばれるテキストを副教材に用いている。低学年とは異なり、日本人教師は日本語と英語を用いて授業を行っていた。

例 1：日本人教師 (5 年生)

教師：テキスト P.20 を開いてください。Open the textbook page 20!!

Body Verbs が書かれており、

①wash my face ②take a bath ③brush my teeth…とまずテキストを基に発音していく。

児童：教師に続き、単語を発音していく。

教師：What are you doing? 発音し、黒板に書く。何をしますか?ではなく、今何をしているかをこの文章は示していると日本語で説明する。次にこの文章に対する答え方は、I'm Studying English. と単語に ing をつけることを示す。全員で、テキストにある単語に ing をつけて発音していく。

①washing my face ②taking a bath ③brushing my teeth…

教師：What are you doing? 1 人ずつに質問していく。

児童：I'm washing my face. とテキストの順番に沿って答えていく。

例 2：日本人教師 (5 年生)

教師：もし、海外に行って財布をなくしたらどうする?

手を挙げている児童をあてて前に出て発表させる。

児童 A: Excuse me. My money lost.

教師：Very good!! 他の児童にもとっても良い発表であることを、促す。

その上で、I lost my money. だと完璧であるとして、児童 A の文を修正する。「誰が何を～する」をはっきり伝えることが重要であると説明を加える。

児童 B: My coin bag No!!

教師：発表した文章は絶対に否定せず、児童 B が行ったように、手振りを使い、目を見て発表すると完璧な文章でなくても、意味は通じるのだと説明をする。

児童 C: それって、目でとるコミュニケーション??と質問する。

教師：その通り! コミュニケーションは言葉だけではなく、目や心でとるものなんだよ。だから、英語が話せないから黙ってしまうのではなく、話そうとする態度が大切なんだよ、と児童に「言葉」の存在意味を伝える。

例 3：日本人教師 (6 年生)

教師：△+□=○と黒板に書く。○ is always 21.

○はいつも 21 になるようにします。今から □の部分に 1~10 までの数が書かれたカードを置いていくので、△の数を英語で答えてください。

△に 10 のカードを置く。

児童：教師が□の部分に置くカードの数を 21 からひいて、英語で全員が答える。

Eleven!! (ちょっと考えながら)

1 回でも間違えるとやり直しになるので、緊張感を保ちながら答えていく。

教師：次に□には、カードを置かないで、英語で数を言います。

Three!! (□に指を差しながら)

児童：Eight teen!!

教師：That's OK!!

教師の言う単語に全神経を集中させて、△の数を答えていく。

慣れてくると、1人ずつあてて、答えさせていく。だんだんスピードを上げ、集中力が途切れないようにする。

例4：ネイティブ教師 (6年生)

教師：in front of, behind, back, by, next to, across, to the right side と 2 回ずつ発音していく。

児童：教師に続き発音を行う。

教師：3 人をランダムに選び、発音した熟語の説明を実践的に行う。

①Miki is to the right of Tomoka.

②Tomoka is in front of Miki.

③Natsumi is between Miki and Tomoka.

④Tomoka is next to Miki.

(しかし、一体何について説明しているのかが、理解できない児童はあまり参加できずにいる。)

教師：Where is Natsumi?

児童：She is between Tomoka and Yuki.

教師：Where is Mariko?

児童：She is in front of Yuka.

とスキットを続けていく。しかし、一部の児童のみが発言しているように思われた。

例5：ネイティブ教師 (6年生)

教師：Please open the textbook page 67. (Musical Instruments)

piano, guitar, violin, cello…と発音していく。

すべての単語に the をつけて再び発音練習を

行う。

(発音練習はとても大切であるが、単純な作業であるため、発音しない児童などがどんどんと増えていく。)

教師：Memory Game!と黒板に書く。説明は例を挙げながら行う。

For example, She said "I can play the flute."

So, you'll say "I can play the piano and the trombone."

Do you understand?

児童：Yes!!

とゲームを始めていく。このような頭を使って行うゲームは何をするゲームであるのかという事を全員が理解できれば参加していくようになる。

III-1-4 小学校 5, 6 年生の授業分析

高学年になってくるに連れ、受け入れ可能な授業とそうでない授業の差が大きくなっていった。特にネイティブ教師との間で生じている問題である。これには幾つかの理由が考えられる。①ネイティブ教師の授業は週に 1 回しかなく他の授業では接する機会が少ないため、児童の心理的状況、性格を理解することが難しい、②単に英語が嫌いになったので授業に参加しないというのではなく、教師とのコミュニケーションが上手くとれない事への苛立ちが起こる、③低学年同様の歌やゲーム等を行うことに対して、羞恥心が起こり、授業への参加を拒んでしまう、等である。

一方日本人教師とは、児童はとても仲が良く、ネイティブ教師との授業が上手くいっていないことを日本人教師に相談しに行く児童もいるようである。これらのことから判断すると、高学年には、他の授業と同様に教師と児童との授業以外での信頼関係が重要であることがわかる。また、高学年になると自我が高くなっていくので、間違いを指摘し過ぎても、話すことを拒むようになるようである。

III-2-1 6 年生による国際交流会

姉妹校であるオーストラリア・タイ・シアトルからの留学生と共に国際交流会が開かれた。この交流会は毎年行われているもので、6年生のみが参加した。

今回の交流会は 7 月に行われたこともあって、七夕がメインテーマとなっていた。

①日本人による七夕の説明

織姫と彦星の話英語と日本語を交えながら紹介していた。

②オーストラリア留学生からの紹介

日本語が話せる人は日本語であいさつする。国歌・校歌・オーストラリアでのポピュラーな歌を披露。その後、参加者全員でオーストラリアで有名な音楽に合わせてダンスをする。見本は前に3人オーストラリア留学生が出て、それを見ながら踊っていく。英語で、ダンスの振りつけの説明を行っているが、児童は真剣な眼差しで留学生の言葉に耳を傾け、一緒にダンスを覚えていた。

③七夕作り

6年生の代表4人が前に出て作り方を説明する。このとき、事前に考えてきた英語で説明を付け加える。

それぞれグループに分かれて願いごとを書いて、ささに付けに行くことを、片言の英語を交えながら留学生たちに説明していた。

6年生の1人の児童は、願いごとを書くことを説明するために、自分の願いごとを短冊に英語で“Everybody happy school”と書き、“Like this!”と留学生に伝え、説明している姿も見受けられた。

④アメリカ留学生からの紹介

スライドを使いながら、自分たちの国、学校の様子を見せていた。その後、国家・校歌を披露していた。英語教師が日本語訳をする等の補佐を務めていた。

⑤タイ留学生からの紹介

タイのさまざまな民族衣装を見せて、タイについて英語と日本語で説明をしていた。英語教師が日本語訳をする等の補佐を務めていた。

⑥全員で合唱

留学生にはローマ字と英語で書かれた歌詞カードを配り、6年生が中心となり全員で日本語による「七夕の歌」合唱。

⑦世界の国の味で白玉団子パーティー

家庭科の時間や総合的な学習の時間を利用して、白玉団子を作りとそれぞれの国でポピュラーとされているソースを作り、試食パーティーが行われた。世界の味と題されたソースには、ヨーグルト・サワークリーム・チョコレート・カスタード・小豆等が並んだ。

III-2-2 国際交流会の分析

国際理解交流会では、授業中ほとんど興味を示さない児童や積極的でなかった児童が司会を務める等、ほぼすべての児童が積極的に外国人留学生に話しかけ、授業時の態度とは比べものにならないものであった。英語が嫌いで、授業に参加していないのではなく教師との関係、授業そのもののあり方が高学年では最も重

要になってくることが分かった。高学年に対しては、なぜ英語を勉強しているのか、何を目的としているのかという具体的な英語に対する動機付けがなされることで、円滑に授業ができるようになるだろうと推測できる。

IV 教師へのインタビュー調査と
児童へのアンケート調査

IV-1 英語担当教師へのインタビュー調査

1年生を担当している教師と5,6年生を担当している日本人教師にインタビュー調査を行った。

質問項目

- ① 英語教育をする目的
- ② どのような方法で指導していくか。
- ③ どの程度の内容まで指導するのか。
- ④ 発達段階の子どもに教える苦労とは何か。
- ⑤ 英語教育を行う上でもっとも困難なことは何か。
- ⑥ 小学校での英語教育が目指すもの。
- ⑦ 教師に求められる資質とは何か。
- ⑧ その他。

教師 A (2, 5, 6 年生担当) の回答

- ① すべてのことに関して意欲・自信を持ってもらうため。
- ② 教科書を用いたり、抽象言語に関しては日本語を混ぜながら指導していく。
- ③ 少しでも使えるような英語を教えることを目標としている。
- ④ 小学校4年生からネイティブ教師の授業を苦痛に思い始める。お腹が痛いと言い、授業を抜けて保健室に行ってしまう児童もいる。これは理解できない空間へ置かれていることの苦痛や、あてられて答えられないで黙っていると教師に怒られるので、どんどん興味がなくなってしまい、逆効果になってしまう。
- ⑤ やはり、高学年からの教育が難しくなってくる。他の教科は急激な知的能力の進歩を必要とされる授業を行っている一方で、歌を歌ったりゲームをする授業では、児童の興味が無くなってしまふ。ゲームをする時は何を教材としてもちいるかが、とても重要になってくる。
- ⑥ どんなことでも、何度か練習をすればできるようになると自信をもたせることが大切である。これは、他のどの教科にでも通じることである。

- ⑦ 小学校英語教師は、エンターテイナーでなくてはならない。
- ⑧ 高学年は特に、ネイティブ教師との授業が問題となっていることが他の学校でも存在している。それは、ネイティブ教師に、児童の気持ちや細かな心情が伝わっていなかったり、ネイティブ教師が表現した抽象言語を児童は誤解した意味で受け取ってしまい、教師と児童との間に大きな温度差が生じていることが多い。また、高学年は、実際にどのような場面で使えるのかといった実践を取り入れることで、興味や授業への参加態度が増すのではないかと。意欲・自信を持たせる事が最も重要である。

教師 B (1, 3, 4 年生担当) の回答

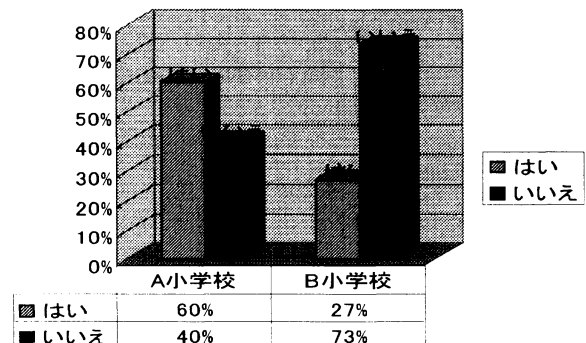
- ① 英語を英語として英語の中で育てる。
- ② 特別な方法はない。しかし、歌・リズムダンス・絵本読み等、教材は授業を進める上で最も重要なものとなる。
- ③ 小学校でしかできないような、歌・ダンス等を取り入れる。小学生は、中学生とは比べ物にならないほどとても耳が良いため、効いた発音をそのまま模倣することが上手である。
- ④ 学年に関して、それほど問題はない。教師側がパワフルに授業を行うことで児童の集中力高めることが重要。
- ⑤ 特にはない。
- ⑥ 英語で聞かれた事を英語で考える力を養うことが目標。
- ⑦ 教師は、自由に英語を話せる事が重要であるので、ネイティブ教師でもノンネイティブ教師でもどちらでも構わない。英語を教えるための環境作りが最も大切である。
- ⑧ 質問に答えるときは、必ず文で答えさせるようにする。子どもの興味のあるトピックを教材に選ぶことで、好奇心を抱かせる。また、総合的な学習の時間を利用して、道案内等も英語で行ったりする。

IV-2 小学生に対する意識調査

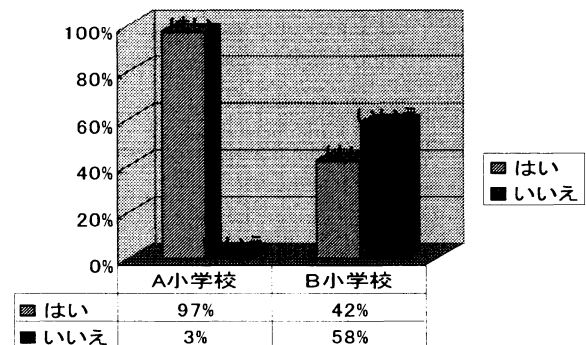
A 小学校 2, 6 年生に対し、英語の授業に対する意識調査を行った。小学生のため答えは [はい・いいえ] の 2 択で選んでもらった。(※意識調査のみ、英語教育を行っていない B 小学校との比較をグラフによって示している。)

1. A, B 両小学校の 2 年生に対する共通質問
児童数 (A 小学校: 81 人, B 小学校: 166 人)

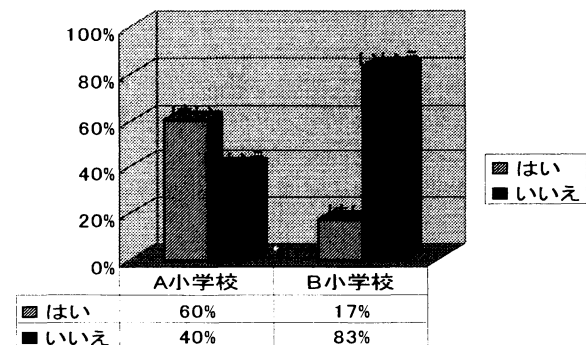
① 学校以外で英語を勉強していますか。



② 英語が好きですか。

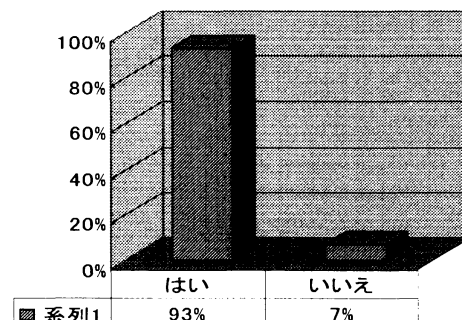


③ 外国に行った事がありますか。

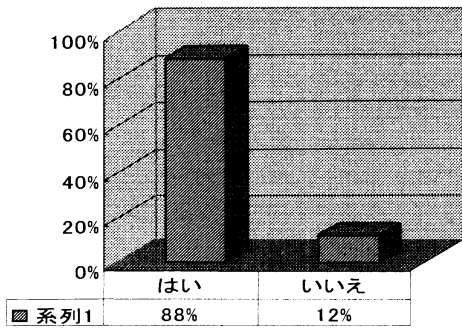


2. A 小学校の 2 年生 (児童数: 81 人) に対する質問
項目

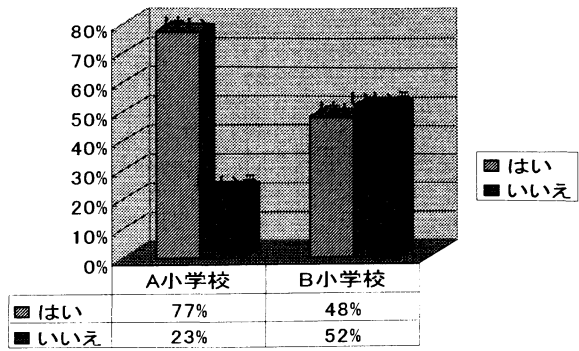
④ 授業中に英語を話すことは楽しい。



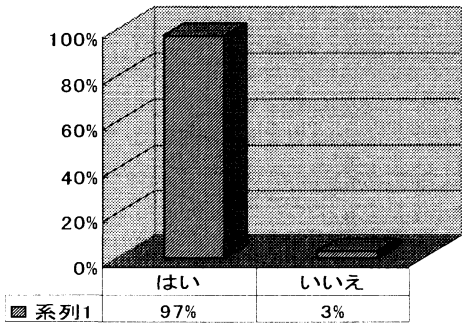
⑤外国人の先生の授業はよく分かりますか。



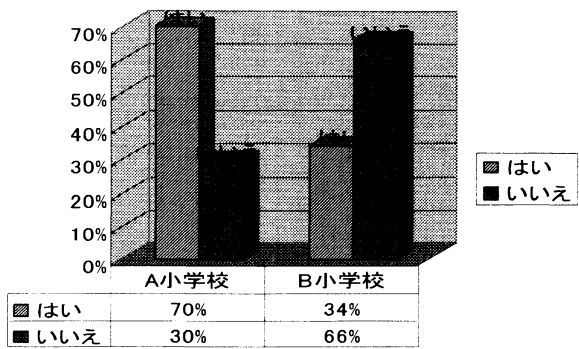
②英語だけでなく、他の外国語も勉強したい。



⑥英語を聞くことは楽しいですか。

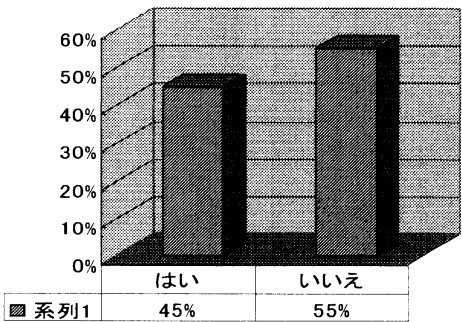


③将来英語を使う外国で暮らしてみたい。

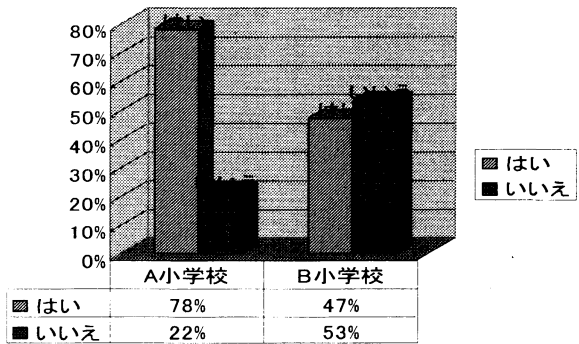


3. B 小学校の2年生（児童数：166人）に対する質問

⑦学校で英語を勉強したいですか。

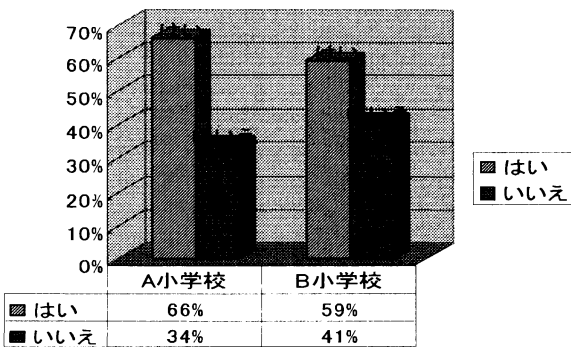


④英語は好きだ。



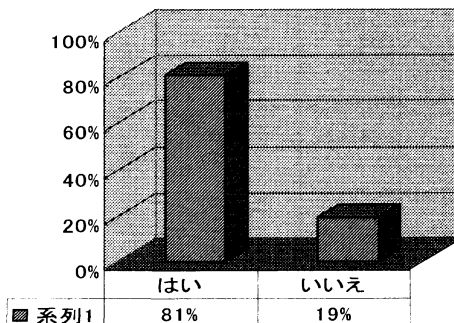
4. A, B 両小学校の6年生に対する共通質問
児童数（A 小学校：83人，B 小学校：172人）

①学校以外で英語を勉強している。

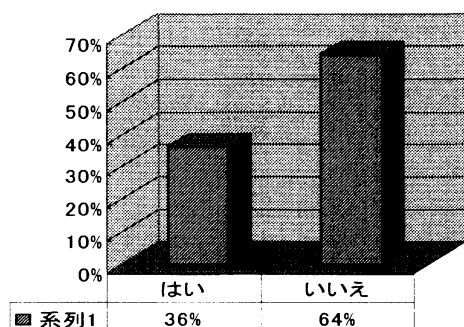


5. A 小学校の6年生（児童数：83人）に対する質問項目

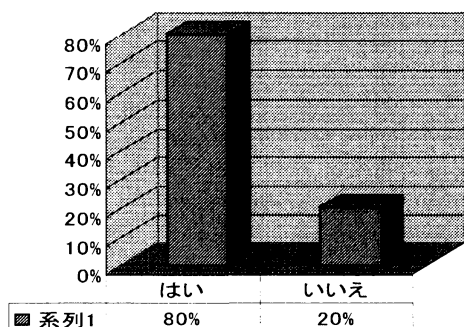
⑤英語の授業は日本人の先生の方が楽しい。



⑥英語は好きだけど、授業は楽しくない。

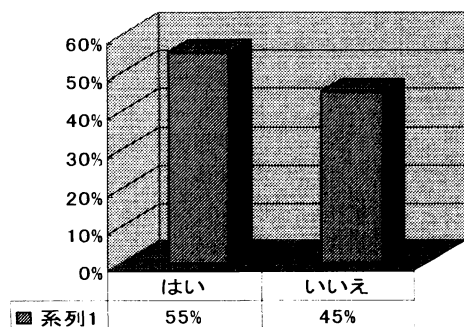


⑦英語を聞くことは楽しい。



6. B 小学校の6年生(児童数:172人)に対する質問項目

⑧学校で英語を勉強したいですか。



IV-3 まとめ

A 小学校の教師からのインタビュー調査, 児童のアンケート調査からも分かるように, 高学年になるに連れネイティブ教師の授業を好まなくなる傾向がある。これは学年が上がるに連れ知的能力の発達に伴いゲームや歌等の授業は好まなくなる一方で, 文法を交えた授業では英語のみの授業は細かな部分が理解できず, 興味が遠のいてしまっている。同じような授業を日本人教師が行うと, 児童は分からない部分や疑問に思う部分を日本語で質問し, 教師は児童に理解促していた。アンケート調査からも, 児童は英語が嫌いで授業に参加していないのではなく, 授業で扱うトピックにより, 興味を失ってしまう可能性もあるということ

が分かった。

つまり, 担当教師がインタビューで述べたように, 児童の関心や好奇心をいかに教師が近づけるか, 教師がいかに児童の興味や好奇心を引き出せるかが小学校の英語教育では最も重要であると考察できる。そういった点でも, A 小学校の日本人教師のように普段から児童と接触する機会を持ち, 一人一人の児童の性格を理解している教師の方が児童にとっても受け入れやすいだろう。

また, 米山⁴⁾は「優れた教師」とは教師の英語使用とその能力以外に以下のような特徴が必要不可欠であると述べている。

○教師は笑ったり, 冗談を言ったり, ほめたりすることが多く, ほめる時間も長く, 内容も妥当であり, 注意をするときには冗談のように言ったり, 目を見つめて言うことが多く, 誤りの訂正は優しく行っている。

○教える内容を身近なものにするなど, 様々な方法で生徒の参加を促し, 生徒の発言にはすぐにフィードバックを与える。

○生徒は授業の前後に教師に話し掛け, 授業に意欲的に参加し, 教師と一体感を持っていて, 教室内に笑いが多く, 雰囲気が暖かく受容的である。

このような状況はまさに, 高学年の日本人教師の授業で行われていたことであり, 児童がなぜ, 日本人教師を好んでいたかという理由付けにもなる。文科省が1999年5月『小学校学習指導要領解説 総則編』で示した通り, 担任教師が授業を行うのが望ましいとしたのとも一致する結果となった。

A 小学校でも英語運用能力を目指した教育よりも, 国際感覚を身に付ける教育を重視して行われている。また高学年になるに連れ英語への興味から外国への興味へと感心する対象が変化していく。国際交流会が円滑にかつ有意義に進められていたのもこういった理由が背景に存在するからと考えられる。子どもたちが日常レベルで異文化を体験することによって, 子どもたちが想像力を働かせて, 異なる文化の存在と異なる文化を持つ人たちとの共生の必要性に, 自ら気づくように仕向けることをねらいとした授業は大切であると考えられる。

一方で, 英語教育を行っていないB小学校でも, 英語を学校以外で勉強していると答えた児童数は予想以上に多かった。さらに, 学校で英語を勉強したいと答えた児童数が2年生では45%だったのに対し, 6年生では55%と半数を超えている。しかし, A小学

校と比較してみると、外国に対する意識や他の言語に対する関心度はやはり低かった。学校以外の期間で英語を勉強している児童が予想以上に多かったとはいえ、やはり他の教育機関では英語運用能力中心に授業が行われていることが多いため、A小学校のような国際感覚や意識は身につけていないのだと考察できる。

V 小学校における英語教育導入の展望

小学校での英語教育は2002年度の新学習指導要領の移行期以来、多くの学校で導入されており、2004年度6月25日の「教育新聞」によると、小学校の9割で「英語活動」は実施されている。また、どの学年とも85%を超えて「学級担任」が指導しているケースが多い。

これほどまでにニーズの高い「英語教育」をいかに効率よく、効果的に取り入れるかは、指導者や学校側の判断に委ねられている。英語を勉強するだけではなく、A小学校が実施していたような「国際交流会」といったもので、実際に使う場面を設定し、またそこから児童たちが感じ取る異文化という世界で、英語という教科に捉われたものではない、新たな国際理解が可能になるのではないだろうか。

Dulay, Burt, Krashen⁵⁾は、「言語運用能力を高めるためには、教科指導の媒体として目標言語を体験した時間の方が、言語だけを目的として指導した時間よりもはるかに有効である」という結論に達している。

言語と思考との関係は多くの言語学者によって研究されてきた。人間の頭脳が言葉とどのように関わっているのかについて David Crystal⁶⁾は次のようにのべている。

ある情緒的な反応が起きたとき、まず言語の存在があってから、次に情緒的な反応があったとは考えにくい。例えば、美しい絵画や不快な出来事に出会ったときの反応は言語以前のものだ。他の人に我々の反応を説明するために言語を用いるかもしれないが、情緒そのものは言語を超越している。例えば、作曲家たちの報告によれば、彼らには書き写したい音楽が聴こえるのだと言う。また、我々の日常の幻想、白昼夢、また他の自由な連想は言語なしに行われるものである。

Crystal が述べているように、言語は感性から起こる情緒的な反応が出てこそ言語が発せられる。そのた

め、小学校で行う英語教育は特に児童の感性に訴えるものでないと、発達段階にいる児童たちには受け入れられないのだ。

つまり、低学年は感性のままに活動することができるため、歌やダンスといった授業は素直に受け入れることができ、教師の模倣も上手に行える。それ故、ネイティブ教師は低学年にとって最適な役割を果たす。しかし、高学年になっていくに連れ、物事を論理的に組み立てて理解出来るようになるため、低学年と同じ内容の授業では、感性に訴えることができなくなる。この研究よって、低学年では歌やダンス、教師の模倣を第一に英語の言語能力、コミュニケーション能力を重点的に置いた授業を行い、高学年ではそれを基に国際理解を踏まえた授業で、実際に使う機会を設けてあげる等、英語を使う楽しみといった感覚を実感させることが重要である。こうすることで児童の感性に働きかけることができ、国際感覚を身に付けたコミュニケーション能力、つまり国際コミュニケーション能力を育成することができる。小学校ではこのような一貫した系統だった授業計画を立てて行い、A小学校のような低学年からの実施が相応しいと示唆できる。

引用文献

- 1) 文部省編『小学校学習指導要領解説 総則編』p. 53-54 1999 東京書籍
- 2) 大津和子「2 共生をすすめる国際理解教育」米田伸次・大津和子・田淵五十生・藤原孝章・田中義信『テキスト国際理解』(国土社) p. 14-26 1997
- 3) H. カーテン/C. A. B. ベソーラ著・伊藤克敏ほか訳『児童外国語教育ハンドブック』p. 108 1999
- 4) 米山朝二「技能教育と人間教育のはざま」『英語教育』4月号(特集:人間教育と英語教育)大修館書店 p. 11-13 1992
- 5) Dulay, Heidi, Marina Burt, and Stephen Krashen *Language Two*. New York: Oxford University Press 1982 H. カーテン/C. A. B. ベソーラ著・伊藤克敏ほか訳『児童外国語教育ハンドブック』p. 157 1999
- 6) David Crystal *The Cambridge Encyclopedia of Language* Cambridge p. 14 1987

主要参考文献

- 金森 強『小学校の英語教育 指導者に求められる理論と実践』教育出版 2003
- 後藤典彦・富田祐一『はじめてみよう!小学校・英語活動』2001
- アプリコット
- 田辺洋二『小学校教育課程の中の英語教育』早稲田大学大学院教育学研究科紀要 第11号 2001
- 中本幹子『実践家からの児童英語教育法 解説編-国際

- コミュニケーション能力を育てるために』アプリコット 2003
- 中山兼芳『児童英語教育を学ぶ人のために』世界思想社 2001
- 服部孝彦・吉澤寿一『英語を使った「総合的な学習の時間」-小学校の授業実践』大修館書店 2002
- 松川禮子『小学校に英語がやってきた-カリキュラムづくりの提言』アプリコット 1997
- 松川禮子『小学校英語活動を創る』高陵社書店 2003
- 松川禮子『明日の小学校英語教育を拓く』アプリコット 2004